

論文内容要旨

Development and evaluation of a formula for predicting introduction of medication self-management in stroke patients in the Kaifukuki rehabilitation ward

(回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者の服薬自己管理導入に必要な予測式の開発と評価)

病院薬剤学 藤原久登

【目的】回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期リハ病棟）に入院している脳卒中患者は認知障害を伴うことが多い。そして自立した社会生活を送るにはセルフケアの確立が基本的、かつ不可欠な課題となる。脳卒中患者の服薬自己管理は、その後の病状の悪化や副作用発現などを予防する上で重要である。しかしながら、脳卒中患者において服用薬剤数や薬剤服用回数など薬剤関連情報を含んだ服薬自己管理導入のための客観的な指標はない。そこで、入院時各 Functional Independence Measure（以下、FIM）項目および薬剤関連情報を含む患者データを用い、統一した基準のもとで薬剤管理指導にあたるための服薬自己管理導入に必要な予測式を作成し、その評価・検討を本研究の目的とした。

【方法】2012年1月～12月の期間に昭和大学藤が丘リハビリテーション病院回復期リハ病棟から退院した脳卒中患者を対象とした。入院時の各FIM項目および薬剤関連情報を含む患者データについて、自己管理群と非自己管理群の2群間の比較を行った。服薬自己管理達成を目的変数とし、単変量解析の結果、有意差が認められた因子を説明変数としてロジスティック回帰分析を行った。すべての検定に関し、有意水準は $p < 0.05$ とした。

【結果】対象患者は104名であり、平均年齢は 70.0 ± 2.3 歳、男性65名、女性39名であった。服薬自己管理を達成した患者は39名（37.5%）であった。ロジスティック回帰分析の結果、入院時薬剤数、入院時FIM歩行、入院時FIM記憶、年齢の4因子が抽出され、以下の予測式を作成した。

予測式 $\ln(p/(1-p)) = -0.229 \times \text{入院時薬剤数} + 0.470 \times \text{入院時FIM歩行} + 0.416 \times \text{入院時FIM記憶} - 0.112 \times \text{年齢} + 4.404$

推定の感度および特異度の関連性を示す指標であるROC曲線下の領域の値は0.926を示し、モデルの推定精度は高いものであった。

【考察】脳卒中患者における服薬自己管理導入にFIM記憶項目、入院時薬剤数や年齢が服薬自己管理導入に影響を与える因子であることが明らか

となった。作成した予測式のモデル診断結果から、モデルの妥当性は良好であり、脳卒中患者の服薬自己管理導入を適切に判定できる可能性が示された。服薬自己管理可能な患者を高い精度で予測することは、患者の服薬エラーの予防、さらには退院後の自立支援の観点からも臨床的意義は高く、回復期のチーム医療に貢献できると考えられた。